

勉強から学ぶ

酒匂中学校 三年 小川 愛理

私たち学生は、毎日学校や塾に行き勉強をする。それは当たり前のように行われていて、勉強＝良い事として扱われる。でも、勉強さえすれば良いのだろうか。私はそうは思わない。大切なのは、「主体性」を持つて勉強することである。

よくある親子の会話の中には、「勉強しなさい」「宿題は終わっているの?」などがあると思う。私もよくこの言葉を言われ、その度に勉強とは何かを考える。親に言われて渋々やる勉強と、やる気を持ち自らやる勉強、どちらも勉強ではあるが、私は全く別なものだと思う。

この二つの勉強の大きく違うところは、それが「主体性」によるものか、「受動性」によるものかだと思う。「主体性」というのは文字の通り、自分の考え方や判断をもとに行動をすることで、「受動性」はその逆、他者などの外的要因によつて行動が左右することである。

この「主体性」が勉強において最も大切なことだと私は思う。

受動的な行動には责任感がないため、どこか他人事になつてしまつ。しかし、主体的に行動すると、その選択を選んだことへの责任感が生じる。だから、よりよい方法をとれるよう前に深く考えるようになる。そして、主体的に勉強に取り組むことで様々な力が育てられるのである。

その代表的なものの一つが忍耐力である。

どうしてもできない問題があるとする。その問題を解決するために、どこまで努力をするか。人に教わる。自分で教科書を読む。分かつている内容から復習をしたりして解決するために多くの時間や手間を使う。その結果、分からなかつたものが段々分かるようになる。そうして少しずつ、何事にもねばり強く取り組める忍耐力が育つ。つまり、主体性をもつて勉強することで自分自身を成長させることができるのである。

そう思つた理由は自身の体験からである。私は、元々は今のように勉強に良いイメージを持っていたわけではなく、むしろ勉強は嫌いな方だった。特に苦手だった英語は、「難しい」「自分には分からない」と半分諦めていた。一回向きあうことをやめたら、分からないますますずると月日を過ごしていた。

そんなとき、塾で改めて文法や知識を教わった。最初は出された宿題をやる。小テストの勉強をする。など受動的に勉強をしていた。

あるとき私はふと思った。これでは根本的なものは変わらないままだと。

それから、私は勉強をするときに、「覚える」「書く」という作業をするのではなく教わったことをベースに自分で考え、判断し問題を解くことにした。そして、初めて自分の力で問題を解くことができた。一度、できることへの喜びを感じたら次もでき

るようになるために分かるまでねばり強く取り組むことができた。段々と、出来ることが増え、私は勉強する度に自分が成長しているのを実感できた。大人になるにつれて、高くて厳しい壁にぶつかることが増えていくと思う。そのとき、自分の力で問題を解決できるように、今から何事にも主体性を持つて取り組んでいきたい。

私は自分を育てるために勉強をする。